

赤木 正(岡山) 池口 喜久(奈良)
 井上 勳(兵庫) 井上 武男(島根)
 井上 悌(岡山) 岩佐 基正(岡山)
 岩崎 倉市(島根) 植田 安昌(岡山)
 右近 文三(広島) 岡崎 泰裕(岡山)
 岡本 照男(岡山) 大賀 壽男(岡山)
 大野 定(岡山) 小宅 正行(兵庫)
 郭 進 祿(臺灣) 梶村 齊二(富山)
 柏木 正文(兵庫) 金光 克巳(岡山)
 岸本 勇(岡山) 北村 直次(兵庫)
 木下 淳(香川) 熊野 武雄(広島)
 見藤 正男(岡山) 古城 昌敏(岡山)
 小橋 幾太郎(岡山) 近藤 實(福井)
 齋藤 孝(京都) 坂部 弘之(岡山)
 佐木山 達男(徳島) 笹野 武夫(和歌山)
 佐藤 正三(広島) 三徳 策朗(香川)
 志賀 一清(兵庫) 下村 猿(岡山)
 下村 利雄(大阪) 須賀 清次郎(愛媛)
 鈴木 治(島根) 鈴木 甚輔(山形)
 十河 三四二(徳島) 多田 瑞彦(岡山)
 田中 早苗(愛媛) 田中 炳吉(岡山)
 谷 幹彦(徳島) 田村 宦(香川)
 土屋 睦夫(岡山) 恒藤 雄碩(山口)
 壺井 清彦(香川) 戸田 信義(岡山)
 中島 博之(岡山) 永瀬 正巳(岡山)
 長野 壽仁(広島) 根鈴 齊史(鳥取)
 野口 正雄(富山) 濱田 正吉(兵庫)
 廣瀬 恭三(岐阜) 古戸 節郎(富山)
 馬庭 迪(島根) 松浦 潔(奈良)
 松尾 正三(広島) 松尾 梅雄(兵庫)
 松田 進(兵庫) 松本 増夫(岡山)
 宮岡 利通(鳥取) 三宅 明(岡山)
 宮田 士郎(神奈川) 矢野 光夫(香川)
 山本 常明(岡山) 山本 將雄(岡山)
 結城 貞昭(東京) 吉岡 威(広島)
 吉岡 誠(島根) 吉岡 繁楠(広島)
 若林 素(岡山) 渡邊 良衛(岡山)

滿支旅日記 (續)

畑 文 平

10月29日(新京より再び奉天へ)

武漢陥落祝賀気分で全市湧き立つ中を午前9時奉天驛に至り「はと」の客となる。茲には今回一方ならぬ御厄介になつた、吉田、淺田兩博士、下山中佐、小笠原中尉の諸氏の見送りの榮を得た。2時奉天着。「ヤマトホテル」に投ずる、奉天も戦勝祝賀の爲め賑か夜は市民の提灯行列が「ホテル」前廣場から忠靈塔附近を火の海と化した。

10月30日

滯奉、市内視察。

10月31日(奉天より承德へ)

午前大學訪問、松井學長、眼科船石教授、橋本教授、北野教授等を訪ね構内を視察する。北野教授の微生物學教室に於ては、蒙古の羊癩(眼蛆蛆症を來す)の標本を見、亦奉天に於ける「コレラ」の謀略的流行に就ての話を聽く(眼蛆症に就ては別所に詳述した)。午後皮膚科技術員氏の案内にて舊城内外の泥棒市を視察し、夜は「ヤマトホテル」に滿洲醫科大學教授團の歓迎宴に臨み、一場の挨拶を試む。其の夜零時に奉天驛發車の夜行列車に乗じて奉天を立つ。風寒く全くの冬心地である。橋本、戸田の兩教授送らる誠に感謝に堪へず。

11月1日

6時前後である、錦縣と呼ぶ車掌の聲に目醒む。未だ暗い。2度目に目覺めたら已に汽車は北寧本線から分かれて錦西省の奥深く入り込んで居る。此邊の風景も滿鐵本線の沿線とあまり差異が無く、赫灰色のうねつた丘陵を有する廣原が無限に續き、毳毛の襟に楊柳が所々に生えて居るだけだが、葉は黄ばんでも未だ振り落されずにあつた。霧に來る驛の附近の民家は、泥橋に圍まれ汽車の様な丸家根も亦泥造りであつた。概ね亦土塀を廻らし前面に門がある。眞黒な小さい豚が2匹も四脚の中を馳け歩いて居る、街道があると小さな驛

馬の尻に大きな淺黄服の滿人が乗つて急がせて居る圖は、よく南畫や洋畫に見る風景である。朝陽、葉柏壽、凌源、平泉と西進するに従ひ、平原に漸く起伏が増し山岳地帯に入つて來た。樹木の無い山脈煉瓦色の山膚、青草見えざる晩秋の耕地、已にあくがれの熱河省である。

銅の窗以上に險峻な尾根が一片の雲も無い夕空を限る頃、山麓を迂回しつつ樂河の岸に沿ふて列車は遂に承德にはいつて來た。茫漠沙漠の様な高原に、目撃く様な街の灯を望んだ時、「オアシス」の縁を見出した「キャラベン」の様に疲を忘れ思ひを未だ見ぬ異郷の町の上に走らせて居た。

雨降らぬ街道に灰神樂の様な砂塵を巻き起しつつ驛から2km. 承徳の街を走り支那風の「承德ホテル」に宿す。

11月2日

顧みれば今を去る260年、大清帝國の主康熙帝が蒙古王公懷柔策の根據地として選んだ熱河承德は、國境古北口より30餘里、中央の丘陵地帯に廣大な離宮(避暑山莊)があり、樂河支流武烈河の清流を距てて東より北方にかけて相對する丘の斜面には離宮に正面を向けて喇嘛の八大寺廟が巍然として天空に聳えて居る。誠に沙漠の中に浮び出た靈氣樓の如く旅人の眼を驚ろかしむるに足る風光を持って居る。近時梟雄羅玉麟が、茲に大軍を擁し豪華を極めて居つたが、滿洲事變後皇軍の熱河肅清と共に秘境の扉が一般に開かるに至つたものである。

鈴木氏と共に朝早く「遊覽バス」の客となる。車は先づ町の南方に開けた都市計畫道路(茲にも盛なる日本人の建設工作の旺んたるを見る)を走つて丘上に建てられた忠靈塔を拜し、市街を巡覽してより離宮外壁外を走る「ドライブウエー」を廻り、市を鳥瞰し、之をめぐる艇輪たる熱河連山の雄大を賞する。遙か東方の山上に200尺高く屹立する錫棒状の大岩石が見ゆるが、棒錘山と呼ぶ。造化の神の戯れにてもあまりに不可思議なる型に

して世界に其の比を見無いと思ふ。承德より古北口に行く鐵道沿線にも斯かる棒状の石山が2箇立ち並んで居るところがあるが、規模は之より小さい。

離宮は康熙帝(皇紀1677年)により營まれ、乾隆帝(皇紀1741年)に依り修復輪奐の美を競つたさうだが、今は庭内荒るるに委かせ、宮殿の建築物は概ね關東軍の司令部として使はれ、見物人は入ることは出来ない。元離宮の寶物は小さな新設寶物館に收藏されて居るが、其の數も尠く質も高からず、残りの大部分は北京若くは湯玉麟に依り奉天に運び去られ、今、國立博物館として奉天名所の1となり居るは既述の通りである。山莊は萬里長城を小さくした様な白石の城壁に圍まれ、艇輪其の長さは4里(日本里)に互つて居り、中に湖あり、山あり、森あり、畑あるが、今は相當荒れはてて1000年前の豪華を忍ぶよすかも無い。

車は河と離宮の間の軍工路を北に走る。左の離宮内に極彩色八角九重300尺の舍利塔が目目を引くが、乾隆永佐寺の跡で附近に湯玉麟の阿片工場があつた所、今承德陸軍病院となり院長三浦軍醫中佐は熱河の地方病に就て語る所があつた。

扱て車は離宮の裏出て八大寺廟の1つ普寧寺の前に止まる。鐘鼓樓、天主殿、正殿等を過ぎて、後方の高臺にある3層樓の大乗閣には木造總金堂の大佛立像が鎮座する。佛像の高さ7丈2尺で、奈良の大佛より2丈も高い、臺の高さが更に1丈ある。堂内は3階の廻廊となり居り4壁の内側には金色泥造の小佛像1萬が一面に安置嵌入してあつたさうであるが、全部盗み去られて今は枚數の小龕許りである。只1體上の方の柱の下に取り残りが輝いて居るのもあはれである。大佛には左右に男身女身脇侍が極彩色の美しい姿態で待つて居るが之等も唇丈け4丈8寸とは相當に大ものである。

此の寺に限らないが極彩色の大塔伽藍善美を盡したものであらうが春秋800年の風雲に洗はれて

色醒め、家根朽ち崩壊の路を辿りつつあるものが、尠く無い。今所々補修中の所もあるが、原型に復する事困難なる可く眞に惜しいものである。

この寺院の東傍にある普祐寺には乾漆塗金色の羅漢 508 軀、何れも身長常人大、若くは 7 尺以上あり、莊嚴の氣堂宇に溢れて居る。之は離宮の北にある羅漢堂修繕中の一時假住居だと云ふ。

大佛寺前を西に進むと右側仕上に城廓の如く連連臺を並べた一廓は有名なる須彌福壽廟である。皇紀 1780 年即ち乾隆 25 年(約 800 年前)後藏の教主バンチヤンツルトニが、遙々西藏より參賀せるを賞でて之に賜つたものと云ふ。高樓の家根は黄色、紫、緑の葉をかけた琉璃瓦、壁は丹色、ベニガラ色に塗り潰し、要所要所は亦琉璃の張煉瓦で、幾百年の風雨に缺け落ちて居れ、色は少しもさめて居らず、外觀如何にも美しく、内部は全く荒れ果てて居る。薄暗き奥の 1 室に給與の惡く落ぶれた様な護持の喇嘛僧が朝夕讀經を續けて居るのも哀れである。茲の本堂 3 階の歡喜佛は大佛殿にあるそれと共に怪奇壯觀である。これより西方に普陀宗乘廟と稱する一大靈寺がある。城廓フダヒリヂヤウリヤオの如き大境内に無数の美しくしき建築物があるが、就中後方山上に屹立せる紅臺と稱する大殿は、高さ 300 尺、方 50 尺、其の内部に廣濶な殿堂あり。金の家根の 5 層の本殿があるが今は佛像は皆持ち去られて影も無い。以上の外猶ほ安遠廟、普樂寺、溥善寺、溥仁寺、殊像寺、廣安寺等の巨刹があるが遠望して其の壯觀を觀賞した許りである。

歡喜佛 (Nandikesvara)

今回の旅行中熱河承德の大佛寺、須彌福壽廟、北京と雍和宮、北海公園の白塔山上の善因殿内等で見したが、其の他諸方の喇嘛教寺閣には無い所は無いと云ふ。

大體喇嘛教は西藏に起つた佛教であつて、第 7、8 世紀の頃印度の密教が西藏に入り、茲にあつた元來の鬼神崇拜と結合して成り立つたものである。本章としては阿闍佛、普賢菩薩、彌勒菩薩等

を拜するが、妖魔を以て惡魔を退治すると云ふ様な「グロテスク」の教を織り込まれて居り、従つて其の傍佛に歡喜佛の如き奇怪なる佛像が作られて居るのである。喇嘛教は西藏から蒙古に入り、蒙古人の最も信仰厚い所である。多倫に大本山たる 2 大寺廟あり、之から支那及び滿洲に擴がり今信者の數が西藏に 400 萬、支那本部に 100 萬、滿洲國に 300 萬ありと云ふ。

扱て問題の歡喜佛は亦大聖歡喜自在天、毘那夜迦、ガナパチ(Gana-pati)等とも呼ばれる、印度に於ける神話にある神で、佛教では其の父はシバ神(Siva)大自在天であり、母はバルバティ(Parvati)であり、シバに屬する鬼兵(Ganas)の大將であり、廣大な威力を持ち總ゆる障礙を排除して突進し、或は他の何物の障礙あるも之を排除する力を有する、例へば無敵皇軍の威力にも比す可きである。従つて難事業を遂行せんとする者の守護神となつた譯である。

佛身の形像は體が人で、首から上が 1 本の牙を有する象頭であつた、併し牛馬の怒れる様な奇怪な鬼面を呈するものもあつた。首や腰に人頭顱の飾環を下げ、手足は 4 對、8 對、16 對等多數を備へ、各手には斧、索、戟、棒等種々の柄物を握つて居る。足下には牛の如き獸類を踏まへ、足を踏み張り大見得を切つて居る、獸の下には更に多數の人體が下敷になつて居るものがある。佛體は單身のものもあるが雙身のものが尠くない。之は男女相抱く姿に表はされて居るが、女身は觀世音菩薩の化身である女天で、身に依て男身の歡心を誘ひ、以て其の暴惡をなだめ柔げる様を表現すると謂ふ。

佛體には金剛珠に眞鍮製のものなど北京の雍和宮等で見したが、承德の寺廟等では、尊身大極彩色の「グロテスク」のもあつた。今は一般に風俗取締上觀覽を禁止して居る所が多い。

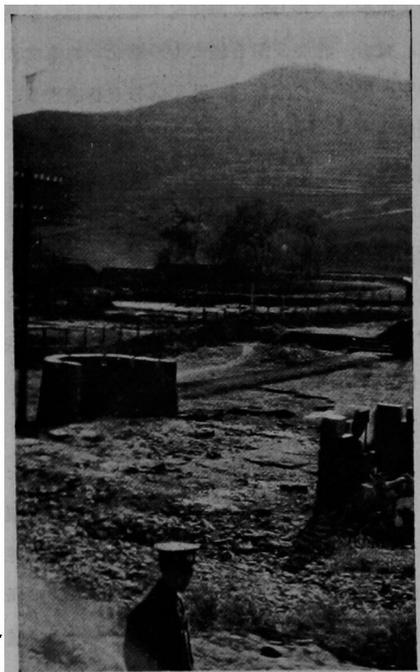
11 月 3 日 明治節 (承德より北京へ)

未だ暗い内に起床旅装を整へて午前 8 時承德發の北京行汽車に乗る。1 日 1 回の運行のことと

て乗客著しく混雑する。殊に2等は3室18人定員の所へ、北京へ移轉と稱する料理店1行20餘名乗り込んだ爲め、足の踏み入る餘地も無い。車窓左方の山脈上に屹立した奇怪なる双岩二頭山を望む頃から、漸次上り傾斜となり、國境の山岳地帯に入る。塞溝門なる驛は全く焼け落ちて居たが、

第 1 圖

北承線塞溝門驛の匪賊に焼討された跡



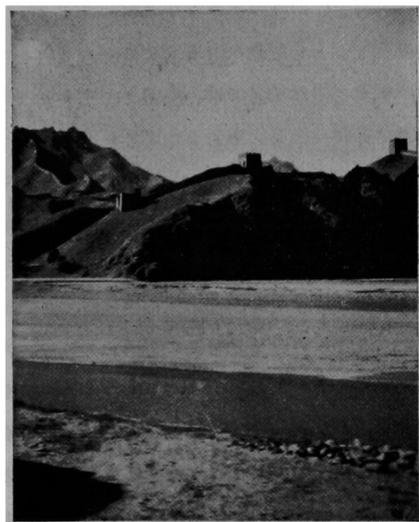
1月前匪賊に襲撃され焼失したもので、其の際譯長以下2人戦死し、白木の墓標が淋しく2基建つて居た。猶ほ3日前も謀平附近の村落襲撃されたとか。之はあとでわかつたが吾々の通過した翌日古北口附近で匪襲があり線路を破壊されたとか、治安の確保に皇軍の骨折は一通で無いことがわかる。

此鐵道は3日前より本營業を始めた所だが、國境の大山嶺は九十九折の急坂を電光形に5段位折り返しつつ線路を通じて居る所がある。共產匪の妨害を受けつつ未曾有の難工事を着々完成する邦人の建設力たる正に驚く可きものと感ぜられる。

古北口では滿洲國及び中華民國兩方の税關検査があり、約1時間停車する。兩側の赫灰色の峯々には半ば崩壊した萬皇長城が蜿蜒と連なつて居るのが見えた。

第 2 圖

古北口驛から望んだ萬里長城



國境を超えて北支の平野に入ると、畑地もよく耕され、樹木も漸次増し、關外とは著しく趣を異にして来る。門を通つて野外から家敷内へはいつて來た感である。

日暮に問題の通州を過ぎ、夜8時北京城外正陽驛に就た。軍の紹介で「王府ホテル」と云ふ下等「ホテル」に入る。

11月4日(北京)

北京は約1000餘年前滿蒙地方に興つた遼が、茲に都城を築いて以來引續き金・元・明・清の王朝が官居した帝都で、燕京、北平府等と呼ばれた。國民政府の南遷後一時政治的中心を離れたが、事變後臨時政府の首都となり明朝北支の建設と共に今後發展を期待するに至つた。

北京は1000年の間各朝廷が1國の首都として夫々帝室の面目にかけて經營したる外、清の康熙・雍正・乾隆3代に亙る燦然たる東洋文化の黄金時代の浪に乗つて増築され、北清事變其の他連年の

内亂に依て荒廢する所があつたとは云へ、今に老大帝國の帝都の偉觀を持ち「腐つても鯛」の實力は充分備へ、新興都市の企及し得ない美を多く持つて居る。

午前市街を見たる後元黎元洪家數跡と云ふ同仁會北支防疫班を訪ふ、班長高木逸磨大教授、副長石井信太郎助教授に會ふ。事變に従ふ宣撫建設工作の1つとして北・中・南支に活躍して居る同仁會の事業の一部として軍の統制下に専ら被占領地方及び軍隊の傳染病豫防の仕事に従事して居る。

午後は高木教授の案内で、南効天壇外苑にある衛生試験所を訪ふ、所長菊地中佐、茲は元國民政府の馬疫研究所であり、小傳染病研究所として今軍が手を入れ、諸種「ワクチン」の製造、傳染病の研究、水質の研究などを盛に開始して居る。將來の發展は見る可しであらう。歸路天壇の見物をして歸宿、「ホテル」北京華壇に移轉する。天喇嘛寺であつたが國民政府時代歐米學生の俱樂部となり、事變後「ホテル」となる、門内車寄せから中庭一帶見事なる菊花が咲き亂れ、華壇の名を辱めないうが「ホテル」としての設備は貧弱である。

11月5日

晩秋の霧の冷たい晴れた朝である。鈴木氏と東華門前發の「遊覽バス」に乗る。紫禁城の黃鸞朱壁の偉容を左に望みつつ、北海公園に入る。入場料を採る御蔭にて、不潔なる無用の支那人居らず、風景も美しいが清潔なること支那の中とは思はれない。島の頂上喇嘛の白塔から見渡した森の都北京の景觀は誠に都會美の極と稱す可く永久に忘れ得ざる印象を残した。

「バス」は市外に出て楊柳の並木に挟まれた「アスファルト」道路を西郊4里にある頤和園萬壽山の離宮に向つた。玉泉山麓の池中に湧く水晶の清けた様な清冽な水、白膚の松樹等忘れられぬ思ひ出であり。昆明湖の水光、萬壽山の壯麗も西太后豪華の跡を物誠る夢の國の思ひがした。徳和園内の帝室大劇場跡、光緒帝幽閉の玉瀾堂、蜿蜒數町

に互る湖畔の極彩色長廊、雲上に聳ゆる黃瓦の排雲殿、佛香閣、異國趣味の湖上の石船を見てから再び車上の人となり最後に城南の天壇に廻つた。見物終つて疲れた身を正陽門外の支那街鮮魚口の便宜坊に運び、味はつた鷺鳥の炙肉は亦一段と北京の情緒を感じしめた。

11月6日

「シャパンツーツリスビューロー」にて歸國の船切符を豫約してから故宮博物院に歴代皇帝の禁裏を見、景山、北海公園を経て市の東北にある文天祥の廟、喇嘛寺の雍和宮、孔子廟等を歴遊する。新政府となつてから國幣を支出して何れも修繕中と覺え支那式の華々しい色彩に榮えて居た。

夜東安市場を見る、大きな観工場式の賣店なり、靴屋、鞆屋、寶石、「ハイイ」店等殊に多い、懸値せざる店殆ど無く、それも $\frac{2}{3}$ 、 $\frac{1}{2}$ 以下に値切るを常とするとは、商賣の天才支那人とは云へ氣味惡き感がした。

11月7日

北風強く寒氣膚を刺し、己に北京の冬來るを思はしめた。午前故宮博物院の西太后の宮裏を觀た後北池子街風神廟に金野山密教研究所主事吉井芳純師を訪ふた己に13年北京にあり、小學、中學を経營し、思想的に日支同化に努め眞の兩國國民融和提携の爲め努力して居る篤志の人である。師の案内にて新支那の軍司令官となる可く十日の一致する吳佩孚將軍の私邸を訪問し、茶を飲み乍ら談數割に及んだ。勿論時局の話はせず、道語めいた自慢話をしながら「循分新書」「論三版五戒眞諦及了生死之不二法門」等の雜書を呉れた。更に支那の社會事業家王春暉氏の邸を訪ひ、夜は高木氏等北支防疫班員諸君より旗亭「大陸春」に招宴を受け、茲で山西防疫班長越川少將に山西の事情を訊くの機會を得た。

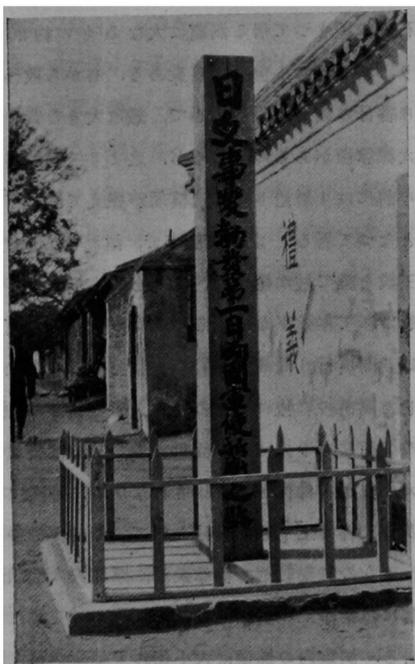
11月9日

「ホテル」で初めて會つた天津の某實業家と鈴木君とで「ハイヤー」を1臺借り切つて北京郊外4里

にある蘆溝橋の古戰場を視察に行く。事件初期の日支軍衝突で名高い廣安門附近はたつた1つの入口から大北京に流れ込み汚ない市民で羊を洗ふ様にごつたかへして居た。北京城外から蘆溝橋迄の街道は古ながらの大きな凸凹の磚石を取り去つて今「アスファルト」の「ドライブウエー」の築造であつたが、これも日本の大陸開發の序曲の1つと思はれた。

第 3 圖

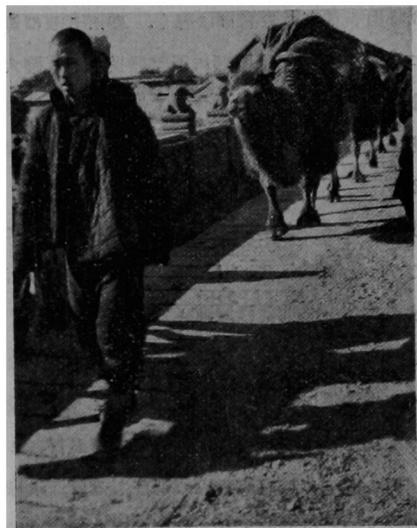
宛平縣城内の事變最初の史跡



宛平縣城に近く鐵道の交叉する所から右に2丁許りはいつた所が所謂一文字山の丘陵で、茲に7月8日及び28日の激戰の記念碑が立つて居るが近くの「ラマ式」石塔の表には機關銃や歩兵砲の彈痕が無數につき居り、そぞる當時の戰の猛烈さを忍びしめた、茲から500米許り西方にある宛平縣城に昇ると城門、望樓も著しく崩壊して見る影も無い。蘆溝橋も亦修繕中であつたが、10數頭も1列を爲して背上の籠に蜜柑を満載して橋上を渡り行く駱駝や馱馬の群には戰時とは思はれぬのどかきが見えた。

第 4 圖

蘆溝橋上の駱駝隊商



午後北京に歸り、大北京の日没の景觀にあこがれて3度北海公園の白塔山に昇つた。

11月10日(北京より張家口へ)

朝寒を夙起、8時には鈴木君と手靴1箇の輕裝で正陽門驛に乗りつける。汽車も中々混雜する。汽車は3,40分もかかつて北京城壁のまわりを南から東北側へと廻り、漸く西効に出で2時間許りで南口驛につく。眼前には已に冀察と遠との綏國嶺の連山が、眉に逼つて居る。この「プラットホーム」で中國聯合準備銀行の紙幣と蒙疆銀行の紙幣との兩換が行はれる、南口からは汽車の漸次上りとなり、牛の歩の様に遅々として八達嶺の險に入る。兩側共眉に逼る赫色の俊嶺に對して、足元深く人馬も豆人形の如く見ゆる豁谷の深き誠に險阻な國境である。此要害を寡兵を以て大敵を打ち破り乍ら進軍した皇軍の勞苦は幾何であつたらうかと感慨無量であつた。峠を昇りつめた所は居庸關驛で此邊の萬里長城は山頂を蛇の如くうねつて誠に見事であるが、軍に依る警戒は極めて嚴重に極めて居て官渡機など取出すことも出来ない。山脈を超え再び茫々たる平原に出る。已に察南自治政府の領であり、内蒙より吹き來る朔風寒く、

雪を伴ひ車内の熱きに比し扉の外に出れば凍える様である。

3時過ぎ首府の張家口に着く。砂ぼこりの舞ひ立つ街を〇〇兵團軍醫部に軍醫部長森島軍醫大佐を訪ひ、蒙古人の生活、食物、性病、喇嘛僧等興味ある話を訊く。大佐の案内にて市の内外を視察する。

張家口は事變前本邦人のあゝるもの数10名に過ぎなかつたが、今4000人位に増加し、内蒙方面に對する重要な前進根據地となつた。

街外れにある外長城の崩壊せる門外が有名なる物々交換市場で、茲で毎朝内蒙方面より來る蒙古人の毛皮と日支人の日用品などの交換が行はれると。街の西郊に賊將馮治中の別荘ある所、水母宮清瀾寺と云ふ小祠があり、茲に張家口唯一の溪泉が湧いて居る。茲から張家口に水道計畫がある。

遠來莊なる俱樂部にて森島大佐、千葉出身の眼科専門の原野軍醫中佐、岡山出身の清水眞軍醫少佐氏等と一夕談して、軍及び地方の衛生醫療設備等を訊き夜12時出發大同に向ふ。一等車なるも寢臺無く、暖房不充分にて寒氣身に沁みた。

11月11日

6時とは云へ未だ暗い内に大同驛に着く、寒い北風が耳が痛い程である。森島大佐から連絡があつたと見えて陸軍病院長岸本大佐が旁々自動車で出迎えて呉れ、城内の部隊住宅に迎えられ種々厚遇を受けた。この病院は現在では戦傷者よりも内科的疾患の方が多いと云ふ。傷病兵慰問の後10時に雲崗の石佛見物に行く。萬一を慮かつて岸本大佐の厚意は16名の護衛兵を「トラック」にて附けて呉れた。

雲崗の石佛

雲崗の石佛とは、山西省大同縣城の西門を出て沙漠の様な高原を貫く左雲街道を西進すること約4里半、武周山谷、北側の砂岩の水平層からなら石崖に、東西約1500米に亘つて開鑿された約20の大石窟と、無数の小佛龕の中にある約5萬に達

する石佛群を總稱するものである。

大同は漢時代に平城と稱し、皇紀1058年より1153年迄96年間北魏氏の首都であつた。北魏文成帝は太武帝に續いて即位すると共に、大に佛教を復興し、僧曇曜に命じて興安2年(皇紀1113年)雲崗に佛龕開鑿の大願を起し、此事業は孝文帝の大和17年(皇紀1153年)都を洛陽に遷す迄40年間繼續したと云ふ。即ちこの大工事は、今から約1500年前に出來た點に於て、驚く可く豪壯な者である。

石佛の藏まつて居る洞窟は大なるもの約20窟あり、其の他に小佛龕が多數ある。右から數へて第6番目の窟が、先づ中心で、茲に大きな黄金色の大釋尊像があるのであるが、之より外部即ち岩窟の前には4層造りの本造樓閣が聳えて謂はば拜殿となつて居る。之が石佛寺で、道路から山門4天王殿を経て茲に達する。松明を高く掲げた寺僧に導かれて本殿下から入ると、奥殿たる大石窟は間口5間奥行6間高さ8間の大岩閣樓で、中央に残した萬角の岩體に釋尊の坐像が彫り出され、横、後の壁面にも中央に坐、立行の像、其の他空虚無く大小無數の佛像が彫り出されて居る。洞窟の4面及び天井も上下3段に分たれて、千佛萬佛の法相、天女の舞樂散華、釋尊說法、摩耶夫人懷胎圖等眞に極樂淨土の眞相を畫き、莊嚴の極を現はして居る。洞窟内の佛像は大小何れも極彩色にして美しくきこと眞に生ける如く、眼を見開き口邊微笑を含みて、美男美女の相を表現して居る。之は帝權の威に依て昔美人の産地として呼ばれた大同の地は素より、諸國から鼻目秀麗なる者のみを集めて「モデル」にしたものだと謂はれて居る。此理由を訊ぬるに、法華經の中に人類文化の歸結を教へた法師功德品と云ふ經文があるが、其の内容に説く所は、人類が5欲の凡情を斥けて無我になつて佛徳を讚美する時、佛の榮光は燦として自ら人天を敬ひ、美しい淨土が自然と出現し、醜いものは皆陀土に移されて塵1つ無く、世界は皆美人

許りに飾られると云ふ。この淨土渴仰の氣分が石佛に表現されて居る譯である。

此石佛に限らず、支那の佛像は何處へ行つても美しい顔をして居る。現代でも美人と謂はれる程度の近代的の容貌をして居るものが多い、而かも男女の脇侍が傍らに侍立して居る。之が100年1000年の昔に出来たものであるから驚かれる次第である。

扱て正殿たる第6窟の向つて右に隣するのが、第5窟で、前者と同様な4層樓の寺閣の奥の洞窟には5丈餘りの大佛が金色燦爛と輝く。石窟内壁には一面に大小無数の佛體佛龕を彫刻してある。之より右翼の第1—第4は餘り大でなく、大方埋もれて見る價値はあまり無い。

左の第7窟は西來第一山の額を掲げ、天井に飛天の見事なる彫刻がある。之から以西には寺樓は無く、洞窟は直接外部に入口を開いて居る。

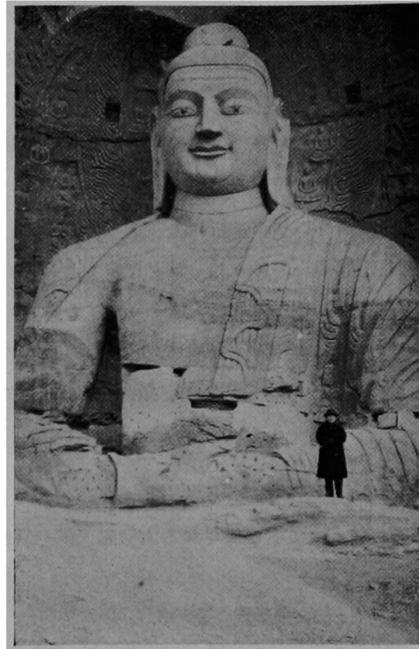
第8窟は佛額洞と呼び、前者と相似たる形式であるが、入口の上に多頭多臂神を一面に刻し其の福やかなる微笑豊麗なる肉體は眞に逼るの感がある。

第9以下の諸窟、亦何れも夫々特徴を示す。佛像に前者と同様に美觀を示すが、第13窟迄は五花洞と稱し、民國になつて風化脱色した石像に、更に泥土を以て補綴し、下手な彩色を施したのが多く、佛像の尊嚴を汚す様なものが多いのは遺憾である。只第20窟の大佛像及び左右の立像は、頗る巨大で、洞窟の崩壊に依り今は露天佛となり、勿論彩色等一切消滅して居るが、反つて1500年前の氣分を其の儘傳へて居り、慈眼豊頬福耳其の柔らかな線、頗る優雅であり、最も傑出した作品とされて居る。之より以西の石窟は多く破壊して居るが、約200米距たれる所に5層の塔を刻した石窟が残つて居る。

大同には石佛の外、市内に上華嚴寺、下華嚴寺の2大寺の存することは忘却され無い。併し之は石佛の名に壓されて旅人に見逃され易いのは遺憾

第 5 圖

大同雲崗の露天石佛



である。大同訪問の際石井、岸本兩大佐の案内でここを見た印象を書くと、上華嚴寺は街中の斜面の様な地に東面して聳えて居る大寺廟で、傍門を入ると境内で左右に庫裡、別殿、僧院等あり、更に石階數10段を昇ると、極めて巨大なる木造の本堂の前に出る。數100年の風雨に丹青の跡は色褪めてあるが、稀なる名建築と思はれた。「大雄寶殿」の大額の掲げてある堂内に入ると、堂の中央には釋迦佛を中央として、巨大なる5基の諸佛體立ち並び、其の間にも多數の小佛あり、何れも信仰の檀家の望みに依て、けばけばしく5彩に塗りかへられ居り、美しくはあるが、佛像としての奥床しさの減じて居るのは惜しい。この佛像群の左右兩翼には、相對して之も巨大なる侍臣侍女の彩色像稍々前倒れの姿勢で10對以上も並列し居るは、亦一大偉觀である。堂背後の壁は一面に極樂淨土を現はしたる古色寂しき大佛畫であり、日本にては到底見られぬ國寶物である。猶ほ本堂と相對して山門の傍の小堂に、黄金造りの女佛像等

身大のもの安置さる。身に鎧をつけ大剣を地上に突き、半眼を開いて斜に前方を見つめた顔貌は極めて莊嚴な感があり、慈悲の劍を以て、東亞の大陸4億の民の爲めに戦ひつつある、今次の聖戦を「シンボライズ」して居る様な思がした。左右には仁王の様な巨大な脇侍が4體、之を守護して居るのも意味ありげである。

兎に角支那の佛像は何れを見ても美しい、懐かしい、柔かい、神々しい感じがする。日本の佛像の眞目鼻つて只戒嚴を示さんとする様なのと著しい差があるのは、佛像に意味づける根本の觀念の上に兩國民性の違ひがあるのに歸す可きであらう。

第 6 圖

驢馬の背に依て運び出される大同露天掘の石炭



扱て大同では午後の半日は岸本氏及び古き岡山の同憲なる軍の軍醫部長石井大佐等の招待を受け種々當地方の事情につき聴くを得た外、上下華嚴寺、大九龍牌等の名所を見物し、街の模様を視察した。皇軍の占領以來人口も増し今邦人数千に達し尙況も活潑に見えた。

夕7時大同驛發の夜行に乗り、北京に向ふ。夜半張家口にて蒙疆經濟委員とかと車内荷物検査がある。

11月12日

朝7時前北京正陽門驛に着、天津行きに乗り換へる。京津線の沿線は樹木の多い平坦地であるが人口稀薄で市街らしきものは少しも見られぬ。廊

坊驛では「プラツトホーム」のあちこちに、事變戦死者の墓標が建ち、可憐な野菊が供へられて居た。天津に近づくと昨年夏の白河の洪水が、未だに引き切らず、村落が渺々たる水波の上に一面に浮いて居る様に見えた。11時過ぎ天津の車站に着、「扶桑ホテル別館」に入る。日本租界公園の直ぐ前である。

軍醫少尉として應召した大田原助教、野村晋中尉等本學出身が茲の桑木部隊には7,8人在勤して居る。氏等及び大同醫院を經營せる鎌倉貢氏に案内されて、市内外を視察する。日本租界の大通旭街から支那街の繁華街を経て、金鋼橋を渡れる所、元の市公署の大建築爆撃の跡、李鴻廟内の破壊の跡を見、引返して桑木部隊の兵站病院たる石井部隊を訪問、恰度軍醫部長の視巡の最中であつたので、一所に講堂に開催の小學慰問演藝の席に列し、亦一行を代表して傷病兵に一言挨拶を述べた。

次に市の南郊の南開大學の猛烈なる爆破の跡を視、其の強力と正鴻なるに驚嘆した。

英國租界の競馬場に行つたが、日本人立入り禁止の軍令の爲め、入場し得ず。獨逸租界の「カフェー、キンスリング」にて音楽と珈琲を味ひ、一時事變中の支那に居るを忘れ、伯林にても居る気分がした。更に佛蘭西、伊太利等の租界を巡視したが、其の國々の様式をした街の様は、各國都市の模倣陳列場の感がし、政治的にも亦其の複雑性を推測せしむるに充分であつた。

夜致美饗なる支那料理店で、岡山出身者の晚餐會を開かれた。顔觸は軍醫少佐三木良定氏、大田原一祥軍醫少尉、野村晋、占部宗近の兩中尉、平井義男大尉、小坂澄治見習醫官及び市の鎌倉貢氏であつて、何れも元氣一ぱい志氣擧つて居た。本兵團は近々京漢線の奥地深く進出して匪賊討伐に向ふと云ふことであつた。

今回の旅行中之等の諸君は勿論、諸地方に於て同憲諸君の歡迎を受け、諸調査に非常な便宜を與

へられたることは誠に感謝に堪へぬ所である。

11月13日

午前10時天津驛發で塘口へ行き「ランチ」にて白河を下り、夜の7時頃漸く河口から15哩も沖に假泊して居る、大坂商船の長江丸に乗船した。午後6時河口の果なき長洲に太陽の赤々と沈んで居つた雄大な光景は、長く忘れられぬ印象を残した。

船は3晝夜を費やして渤海灣、黄海、玄海灘を横り16日の夕7時に門司に歸つた。

内地に歸つてから前後1箇月に互る滿支視察の

跡を振り返つて見ると東洋平和の長期建設を目ざして嘗々として鑿を振ふ吾が日本民族の活動の有様が走馬燈の様に腦裏に蘇がへつて來る。内地の人は先づ滿支蒙の現勢を現地に見なければならぬ、百聞一見に如かずとは古くして亦新しい言葉である認識とは眞に眼で見で識るのである。知つて始めて之に對する計畫が立てられる譯である、大學などでも結費の許す限り大に人を大陸に派遣すべきである。而して後に眞に大陸への發展が期待出来るであらう。